

エアミス
Airmys

非実在 探偵小説研究会

13



エアミステリ研究会

非実在探偵小説研究会13号 目次

企画

企画1 お題競作「クローズド・サークル」

核シエルターの怪事件

悪魔が迷い込んだ山荘で

二つの手掛り

企画2 二〇一六年度エアミス研ミステリランキング

企画3 ショート・ショート

読み切り短編

仕様書変更

あるいは夏の、その顛末^{エピローグ}

その他

〈連載〉富士見ミステリー文庫ガイド 第四回

司波 6

麻里邑圭人 38

足住公達 74

..... 140

..... 216

光田寿 145

紫藤はるか 178

ないと 173

表紙・扉ページ

ウスタアヤ

悪魔が迷い込んだ山荘で

麻里邑圭人 まりむらけいと

0

血も涙もない外道の所業。

……多分これから自分がやろうとしていることを知ったら、大半の人間がそう言つて批判することだろう。

いや、それとも人の皮を被^{かぶ}つた悪魔と恐れられるだろうか？

どちらにしても、その印象は間違っている。自分に言わせればこれは天罰の代行だった。その証拠に、ここは偶然と言うにはあまりにも舞台が整いすぎている。まるで神が自分にそうしろと仕向けているみたいで……。

(いや、そうではない。これは自分の意志でもある。だから言うなればこれは神との共犯関係なのだ)

神と人が手と手を取り合つて許しがたい罪人に裁きの鉄槌を下す——そう考えたと自然と胸が熱くなってくる。

今の自分を止めることは、誰にもできないだろう。何

しろこれからやろうとしていることは、他ならぬ神のお墨付きなのだから。

1

名探偵行くところに事件ありという言葉がある。

それは事件が探偵を呼び寄せるのか、はたまた探偵が事件を引き寄せるのかは定かではないが、どちらにしろ名探偵というものがいかに事件に遭遇しやすいのかを的確に表した上手い言葉だと思う。

しかしながら、物には限度というものがある。今の僕たちを取り巻く状況には、長年ワトソン役を務めてきた僕でさえも愚痴をこぼさずにはいられなかった。

「……ひどいな、これは」

僕がそう仏頂面で呟くと隣の由比藤^{ゆいとう}も珍しく同意する。「ああ、全くだよ、ワトソン君。いくら名探偵が事件に

縁があるとはいえ、さすがに休む暇もなしというのはちよつと人使い——いや、名探偵使いが荒いんじゃないか？
しかも新年早々二連続だぞ？」

まるで名探偵がブラッくな職業（？）と言わんばかりの口振りである。それを言ったら由比藤だつてワトソン使いが荒いじゃないかと僕は思ったが、ただでさえ厄介な話が更に厄介になりそうだったので、あえて口には出さないでおく。

何気なく腕時計に目を落とすと、時計の針は午後六時ちようどを指していた。

僕は何度目か分からない溜め息をつきながら、視線を腕時計からその厄介な話の元凶へと向けた。

現在、別荘にある客室は全部で七部屋——そのうちの一つであるこの部屋で一際異彩を放っているそれは、明らかに殺されたと分かる、シャツの左胸に風穴を空けた男の死体だつた。

多分、自分が殺されるとは夢にも思っていなかったのだらう。驚愕に凍り付いた男の顔はどうも眞面目に見ても壮絶以外の言葉が当てはまらなそうだったが、幸い出血量の方はそれほどでもなかったので、血に弱い僕でも何とか耐えることができた。

そして、その死体の傍らには白いA4用紙——そこには金釘流の黒い文字でこう書かれていた。

〈二人目の罪人は裁かれた〉

*

話は二時間前——一月八日の午後四時まで遡る。さかのぼ

……思えば方向音痴に定評がある由比藤に車の運転を任せてしまったのがそもその間違いだつた。

何故そんなことになつてしまつたのかと言えば、ひとえにあの事件のせいの一言に尽きる。

あの事件——年が明けて間もない雪の降る新潟の山村で起きた、あの凄惨なわらべ歌連続見立て殺人事件のことを僕はこの先忘れることはないだらう。様々な紆余曲折があつた末、今から数時間前に由比藤がようやく解決に導いたが、僕に言わせればそれは本当の意味での解決とは言えなかつた。何故なら関係者が一同に会した席で由比藤に追い詰められ命を絶つた犯人はただの黒幕の操り人形に過ぎなかつたからだ。そして犯人を裏で操つて

いた黒幕はというと、気付いた時には既に証拠という証拠を消し去り、法の届かぬ場所へと逃れた後だった。

当然のことながら村を後にする時の胸糞の悪さは半端なかった。

由比藤はそんな僕の心中を察したのか「こういうこともたまにあるものさ、ワトソン君」と声を掛けてくれたけれど、僕の気持ちは少しも収まらなかった。多分、このまま運転したら間違ひなく事故を起こしてしまう——そう思った僕は由比藤に頼んで運転を代わってもらうことにしたわけだが……。

（まさか、それがきっかけであんなことになるとは思ってもしなかったな）

行けども行けども街らしきものが全く見えてこないことを不審に思ったら案の定、道に迷っていた。しかも不幸は重なるもので、車が原因不明のエンストを起こし、山の中で立ち往生してしまった。すぐさま電話で助けを呼ぼうとしたが、取り出した携帯のディスプレイには無情にも圏外の文字が表示されている。

幸い雪は止んでいたが、相変わらず山の寒さは厳しく、このままエンストした車の中で待っていたら凍え死んでしまうだろう。そう判断した僕たちは車から降りて雪が

降り積もった山道を歩くことにしたわけだが、それから二十分以上歩いて車はおろか人つ子一人見かけないのにはさすがにまいった。加えて風邪でもひいたのか、先ほどから鼻が詰まってひどく息苦しい。

（もしこのまま人に会うことなく行き倒れなんてことになったらどうしよう……）

そんな不安が幾度となく頭をよぎったが……結論から言うとなんか僕たちを見捨てなかった。

——歩き始めてから三十分ばかり経過した頃。

徐々に辺りが暗くなり始める中、不意に由比藤が家の明かりらしきものが見えると言ひ、その指差す方を見てそれが決して幻覚ではないことが分かった時は、心の中で思わず快哉を叫ばずにはいらなかった。助かったという安堵感からへなへなとその場に座り込みそうになるが、何とか気持ちを奮い立たせて視界に映るロツジらしき二階建ての建物へと歩を進める。

玄関までの距離はぱつと見、五十メートルあるかないかといったところだが、雪のせいでなかなか辿り着くに難儀した。ようやく雪よけのある玄関の前まで来ると、僕はかじかんだ指でドアの脇に備え付けられているインターホンを押した。

……だが、どうしたとか、しばらく待っても家人は誰も出てこない。

（明かりは点いているのに一体どうして……？）

僕と由比藤が顔を見合わせていると、やがてガチャリと鍵が外される音がして、閉ざされていたドアが外側に向かつてゆつくりと開かれた。

出てきたのは大学生くらいの真面目そうな青年だった。

顔はなかなか整っていたが、目の下にある濃い隈くまのせいでどことなく陰気な印象を受ける。加えてよく見れば青年の胸には白いプラスチックでできたネームプレートらしきものが付いており、そこには黒のマジックで（伊神美之いがみ よしゆき）と書かれていた。

彼——伊神青年は警戒するような眼差しを僕たちに向けて「失礼ですが、あなたたちは……？」と硬い声で尋ねてきた。

多分ここで本当のことを告げたら話がややこしくなる——そう思った僕は咄嗟とっさに自分たちのことを道に迷った温泉客という設定にして、車がエンストして困っている、携帯も圏外だしこのままでは凍死してしまう、と身ぶり手振りを交え必死に伊神に訴えかけた。その間、伊神はずっと強張った表情で聞いていたが、一瞬だけその表情

に動揺の色が見えたのは僕の気のせいだろうか？

「……成る程。それはまた大変でしたね」

やがて一通り僕の説明が終わると、伊神は幾分同情するような口調で言った。

（良かった！ 分かってくれた！）

それを聞いて、僕はほっと胸を撫で下ろしかけたが……どうやらその判断は早計だったようだ。すぐに伊神は

「ですが」と申し訳なさそうに首を振って

「こちらにも事情がありまして、ここであなたたちをすんなり受け入れるわけにはいかないのです」

「何ですって……。そんなこと言われても僕たちだってもう行く場所がどこにもないんですよ!」

「それならまた元いた車に引き返せばいいだけの話じゃないですか」

「引き返せばって、あなたは今まで何を聞いていたんです？ エンストした車なんかでこの寒さが堪えきれないじゃないですか!!」

「でも雪や風は確実にしのげますよ。それだけでも大きいじゃないですか」

「いや、しかし——」

そう、僕がなおも伊神に食い下がろうとした正にその

時だった。それまで黙っていた由比藤が口を挟んだのは。

「……ははあ。それを聞いて、ようやく理解しましたよ」

由比藤は何やら訳知り顔で頷くと、伊神の顔を真つすぐ見据えた。「今現在進行形で何らかの事件がこで起こっている。だからあなた方はここに余計な部外者を入れたくないのですわ」

「!?」

瞬間、伊神の目が愕然^{がくぜん}としたように大きく見開かれる。

思わずどういふことかと由比藤に目で問いかけると、由比藤は「別に推理でも何でもないよ、ワトソン君」と事も無げに言った。

「どうも鼻が詰まっているらしい君には分からなかったのかもしれないが、彼の服から仄^ほかに硝煙——銃の火薬の匂いが漂ってくるのさ。まあ彼自身気付かなかったのはニンニク料理を食べた本人がその臭いに気付かないのと同じ理屈だよ」

「そ、そうだったのか……」

「そして何より重要なのは、彼が先ほどの君の説明——車がエンストしている、携帯が圏外で使えないという部分を聞いて明らかに動揺したことだ。そこから推測するに恐らく今この建物は何らかの理由で外部との連絡手段

が断たれ、孤立している、所謂“嵐の山荘”的な状況にあるのではないか……違いますか？」

「……あ、あなたは一体何者なんですか？」

伊神の見開かれた目に、初めて由比藤に対する恐怖の感情が浮かんた。それまで硬かった声が、ひび割れたように震え出す。

「その並外れた洞察力……とてもただの道に迷った温泉客とは思えません」

「まあ温泉客というのは嘘ですが、道に迷ったという点だけは間違っていないですよ」

由比藤が苦笑しながら言った。「それはさておき私からあなたに一つ提案があるのですが、いかがでしょうか」

「提案……と言いますと？」

「なあに、簡単な話です」

由比藤はピンと人差し指を立てると、伊神に向かって微笑みかけた。「もし我々をここに置いて頂けるなら、その見返りとして私が今こで起こっている問題を見事解決して差し上げますよ」

続きは「非実在探偵小説研究会12号」でお楽しみ下さい。

企画2 2016年度エアミス研ミステリランキング

エアミス研研究会が選んだ2015年度のミステリランキングです。2015年9月～2016年10月の間に発売された国内ミステリ新刊書を対象としています。投票者が選んだ5作品を1位：5点、2位：4点…5位：1点として集計しました。

各作品レビュー：麻里邑圭人

1位：井上真偽

「聖女の毒杯 その可能性はすでに考えた」【42点】

探偵が奇跡を証明するために全ての可能性を論理的に否定みせるシリーズの2作目。前作同様、多重推理形式を採用しつつも新たに捻りまくったプロットとコンゲーム要素を盛り込むことで、よりエンタメ性が増した傑作に仕上がっている。

2位：青崎有吾「アンデッドガール・マーダーファルス1」 ／青崎有吾「図書館の殺人」【30点】

奇しくも同作者の作品が同率2位になる結果となった。前者は異世界設定を活かし定番のネタに意外な応用例を示した画期的作品。対して後者は現実の図書館で論理と探偵の試行錯誤ぶりが楽しめる作品である。

なお青崎有吾は他にもベスト10内に2作品（6位「ノッキングオン・ロックドドア」／9位「アンデッドガール・マーダーファルス2」）ランクインさせており、そこから見ても2016年が青崎有吾の年であったのは間違いないだろう。

3位：早坂吝「誰も僕を裁けない」【24点】

エロと本格の融合を追求し続ける（？）上木らいちシリーズの三作目。今回は更に社会派（！）との融合にも挑戦しており、しかもそれが実に意外な形で達成されていることに驚かされる。本作は奇跡的なバランスで成立した作者の最高傑作と断言していいだろう。

4位：芹沢央「許されようとは思いません」【21点】

日常に潜む狂気を描いたミステリ短編集。表題作は「余命僅かな人間を何故殺害したのか？」というミステリ読みにはお馴染みのホワイダニットに挑んだ作品で、異形の論理とそこに込められた切実な想いが読む者の胸を打つ本格ミステリの傑作である。

5位:白井智之「おやすみ人面瘡」【17点】

全身に脳瘤と呼ばれる顔が現れる人癩病が蔓延した日本。そこで起こる殺人事件を描いた本作は、その特殊設定だからこそできる気が狂った（誉め言葉）仕掛けの数々が実に素晴らしく、例えるなら平山夢明と門前典之が悪魔合体した（！）傑作にして怪作である。

6位:青崎有吾「ノッキンオン・ロックドドア」／市川憂人「ジェリーフィッシュは凍らない」【13点】

7位:青山文平「半席」／早坂吝「アリス・ザ・ワンダー・キラー」【11点】

8位:三津田信三「黒面の狐」／米澤穂信「真実の10メートル手前」【10点】

9位:青崎有吾「アンデッドガール・マーダーファルス2」／殊能将之「殊能将之 未発表短篇集」【8点】

10位:七河迦南「わたしの隣の王国」／紅玉いづき「現代詩人探偵」／古野まほろ「臨床真実士ユイカの論理 文渡家の一族」【7点】

《11位以下の作品》

【5点】 弐健二「ケムール・ミステリー」／高木敦史「鉢町あかねは壁がある」／深水黎一郎「倒叙の四季 破られたトリック」

【4点】 樺山三英「ドン・キホーテの消息」／似鳥鶏「家庭用事件」／平石貴樹「松谷警部と向島の血」／円居挽「日曜は憧れの国」／森川智喜「トランプソルジャーズ 名探偵三途川理 vs アンフェア女王」

【3点】 朝井リョウ「世にも奇妙な君物語」／大倉崇裕「スーツアクター探偵の事件簿」／逸木裕「虹を待つ彼女」／北山猛邦「ダンガンロンパ霧切4」／小林泰三「失われた過去と未来の犯罪」／小林由香「ジャッジメント」／滝田務雄「ボンコツ探偵の名推理」／法月綸太郎「挑戦者たち」／古野まほろ「ねらわれた女学校 セーラー服と黙示録」／古野まほろ「ヒクイドリ 警察庁図書館」／円居挽「シャーロック・ノートII 試験と古典と探偵殺し」／明利英司「幽歴探偵アカイバラ」／山田正紀「屍人の時代」／詠坂雄二「人ノ町」

【2点】 浦賀和宏「緋い猫」／澤村伊智「ずうのめ人形」／松本英哉「僕のアバターが斬殺ったのか」／深木章子「猫には推理がよく似合う」／皆川博子「クロコダイル路地」

【1点】 市川哲也「名探偵の証明 蜜柑花子の栄光」／森川智喜「ワスレモノ」

2016年度エロミス研ランキング

対象期間、集計方法はミステリランキングと同様です。“エロミス”の評価基準としては『どれだけ自分がそのシチュエーションに興奮したか』です。早い話、恥も外聞もかなぐり捨てて、思う存分自分の性癖をさらけ出した赤裸々ランキングとなっております（爆）

各作品レビュー：麻里邑圭人（3位のみ 神山六人）

1位：早坂吝「誰も僕を裁けない」【24点】

安定のエロミスシリーズ第3弾。表紙の援交探偵らいちのメイド姿を見て「成る程、今回はメイドHでいくのか」と思ったあなた、残念ながらそれはハズレである。しかしながら飛鳥部勝則の某作を思わせる大胆なエロトリックは充分期待に込めてくれるだろう。

2位：青崎有吾「アンデッドガール・マーダーファルス2」【8点】

異世界本格シリーズ第2弾。本作は作者がロジックだけでなくコンゲームや伝奇バトル、果てはエロまで書けることを証明した記念すべき作品である。とりあえずクールビューティーのムフフなシーン（！）が三度の飯より好きな人は必見。

3位：古野まほろ「ねらわれた女学校 セーラー服と黙示録」【7点】

探偵養成学校・聖アリスガワ女学校の面々が活躍するシリーズの短編集。うち「あらわれた悪魔」は学園内で行われるサバトや魔女裁判を扱った内容で、それらの淫靡や拷問の交じった描写さえ合えばエロミスとしても楽しめる作品である。

《4位以下の作品》

【6点】 白井智之「おやすみ人面瘡」

【5点】 三津田信三「黒面の狐」／連城三紀彦「わずカーしずくの血」

【3点】 西澤保彦「帰ってきた腕貫探偵」／野崎まど「バビロンII 一死一」／古野まほろ「ヒクイドリ 警察庁図書館」

2016年度漫画・ゲーム・映像ミステリランキング

漫画、ゲーム、映像、その他を対象とした、ランキングです。対象期間、集計方法はミステリランキングと同様です。

作品レビュー:(1位 ギガントドラゴン、2位 麻里邑圭人、3位 まるしゅん)

1位:バイロン・ハワード&リッチ・ムーア 「ズートピア」【19点】

全動物の平等を掲げる街「ズートピア」で続発する動物失踪事件。エルロイすら思わせるクライムサスペンスとして、あるいは、ウサギとキツネが互いを理解する過程を描くパディものとして傑作である。伏線収束の巧みさにも注目の作品。

2位:加藤元浩「自転車泥棒」(「Q.E.D.iff」3巻)【12点】

探偵役自身がタイトルにもなっている過去の事件と再び対峙する本作はノスタルジックな見せ方もさることながら、二転三転する展開の果てに待ち受ける苦い真相とそれでも希望ある結末がいつまでも読む者の胸に残る傑作である。

3位:新海誠「君の名は。」／黒沢清「クリーピー偽りの隣人」【10点】

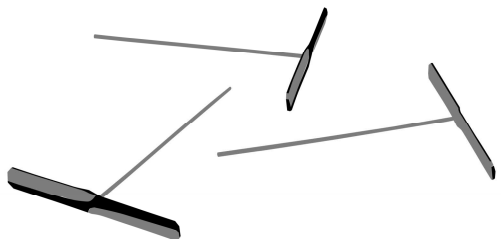
対照的な作品が同率3位に並んだ。前者は往年の青春SFに捻りを加えて、中盤からの物語の変調に驚かされる大ヒット作。後者は黒沢清監督作で俳優の怪演と計算し尽くされた映像により、圧倒的に悍ましい悪意に満ちた作品である。

《4位以下の作品》

【8点】 カルロス・ベルムト「マジカル・ガール」

【5点】 豊島圭介・古厩智之・吉田浩太「徳山大五郎を誰が殺したか？」／深田晃司「淵に立つ」／藤田陽一「おそ松さん第8話Aパート『なごみのおそ松』」

【4点】 天樹征丸・さとうふみや「人形島殺人事件」（「金田一少年の事件簿R」8～9巻）／平林勇「劇場版しまじろうのわお！『しまじろうとえほんのくに』」／森翔太「わたしは不幸を呼ぶ女」（乃木坂46 個人PV 堀未央奈）／リアル脱出ゲーム アニメ逆転裁判「霊媒村殺人事件」



【3点】 庵野秀明・樋口真嗣「シン・ゴジラ」／加藤元浩「第27回探偵推理会議」（C.M.B.）31巻）／岸誠二・福岡大生「ダンガンロンパ3 The end of 希望ヶ峰学園 未来編・絶望編・希望編」／篠崎誠「SHARING」／下田正美「ゼーガペインADP」／奈須きのこ「第六特異点 神聖円卓領域 キアメロット」（「Fate/Grand Order 第六章」）／西野圭亮・池田一真「もうひとりいる」（乃木坂46 個人PV 伊藤純奈）／ヨルゴス・ランティモス「ロブスター」／「水曜日のダウンタウン2時間スペシャル『グラビアアイドルでも芸人の言う通りにコメントすれば面白い説』」

【2点】 及川拓郎「スペシャリスト第4話『女刑事・姉小路の罪 5年の嘘！？ 京都～東京2つの殺人の点と線』」／加藤元浩「碧の巫女」（「Q.E.D.iff」4巻）／キム・ジェオン・ホーン「探偵なふたり」／近藤大介「サボタージュ」（乃木坂46 個人PV 齋藤飛鳥）／桃井かおり「火 Hee」

【1点】 ウィリアム・ブレント・ベル「ザ・ボーイ ～人形少年の館～」／CAPCOM「逆転裁判6」／クリント・イーストウッド「ハドソン川の奇跡」／白石和彌「日本で一番悪い奴ら」／謎解きLIVE・綾辻行人「[四角館の密室]殺人事件」

投票へご協力ありがとうございました。



非実在探偵小説研究会～Airmys～13号

発行日 2017年5月7日
発行 エアミステリ研究会
連絡先 airmysdj@gmail.com
 <http://www43.atwiki.jp/airmys-dj/>
価格 900円
印刷所 株式会社ポプルス

Special Thanks

編集作業をお手伝いして下さったエアミス研有志メンバー

©2017 エアミステリ研究会 作品の著作権は各著作者に帰属しています